



Sweden 旅の途中で (絵・文 深井せつ子)



「コクスカ・クローゲン」

スウェーデン第三の都市・マルメもずいぶん変貌した。造船所跡地はモダンな集合住宅地域となり、高層ビルも増えてきた。

でも、ずっと変わらないのが旧市街地区。ここに私は、思い出のレストランがある。ストーラ・トリー広場に面した半地下の店。現在は「オルステイデルナ」という一流スウェーデン料理店だ。

が、長い間「コクスカ・クローゲン」と呼ばれる人気の酒場兼レストランだった。16世紀初頭のレンガ造りの建物で、ヨルゲン・コックという銀行家の大きな館だ。半地下はワインの酒倉庫だったという。最初にそこに入ったのは1985年。でも翌年の夏、某婦人雑誌の取材で私はまた半地下の薄暗い店内に居た。

軽い食事を楽しみコーヒータイムの時だった。なんとも味のあつた赤銅色のコーヒーポットからコーヒーが注がれた。ジーンと見えていた私は考えるより早く言葉が出てしまった。

「そのポットを売ってください」

「いい」ウェイターは、もちろん渋い顔で拒絶した。

「これは店の道具ですか」

「実は私には幼子が2人いて日本からはたぶんもう来ることが出来ないんです。その素敵なポットをこの店の思い出にしたいのですが……」

無茶苦茶な申し出だが、この地に、この店に、私は二度と来ることとはないだろうと本気で思っていたのだ。店長が出てきて笑顔で売ってくれることになり、私は感激して大事に日本に持ち帰った。ただその後、足掛け25年強、私は北欧通いを続けている。マルメにも出かけるが、思い出すたびに恥ずかしく、その店に入る勇氣はいまだに出てこない。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『一枚の布をぐるぐるぐる』など。北欧絵本『森はみんなの保育園』は昨年10月に出版された(全て福音館書店)。

[ホームページ]
www.setsukofukai.com





Sweden 旅の途中で (絵・文 深井せつ子)



「夏至祭は水の上から」

ダーラナ地方・レクサンドの夏至祭は、水の上から始まる。

白樺の若葉をいっぱい飾りつけた木製のボートは、民族衣装も華やかな老若男女を乗せてレクサンド教会の船着場をめざす。

ボートは次から次と到着し船着場は民族衣装で花が咲いたよう。

水上から人々がやってくる伝統は、ひとつには各村からの交通に水路が一番便利だったこと。また深い森ではオオカミやクマなどに遭遇する危険性があるため、安全な水路交通を利用したらしい。

船着場からは教会が見える距離なので、皆ゆつくりと歩を進めて行く。レクサンド教会は、ゴシック様式などの壮大なものと真逆で、素朴で優しい建築物だ。内部はほとんど木造で、いたってシンプル。

オルガンや人々の賛美歌もやわらかく響く。この日は牧師様のお説教も人々の賛美歌も、夏至祭を迎える神聖さに満ちているように感じられた。

式次第が終わると、人々はゆつ

りと祭の会場まで移動。バイオリンを演奏する人々は支度を始め、その演奏が始まるころ夏至の柱を担いだ人々が入ってくる。ここからはスウェーデンファンの方々ならおなじみのマイストング立て、そして伝統のダンスが始まることとなる。

夏至祭は国内の野外公園や学校、保育園などさまざまな場所で開催される。私もストックホルムのスカンセン野外博物館で夏至祭を見る機会があった。

ただ、ここダーラナ地方各地域の夏至祭は最も伝統色が濃いと誰もが認めることと思う。

何艘もの美しいボートが澄んだ水の上をすべるようにやってくる光景は、胸躍る体験だった。

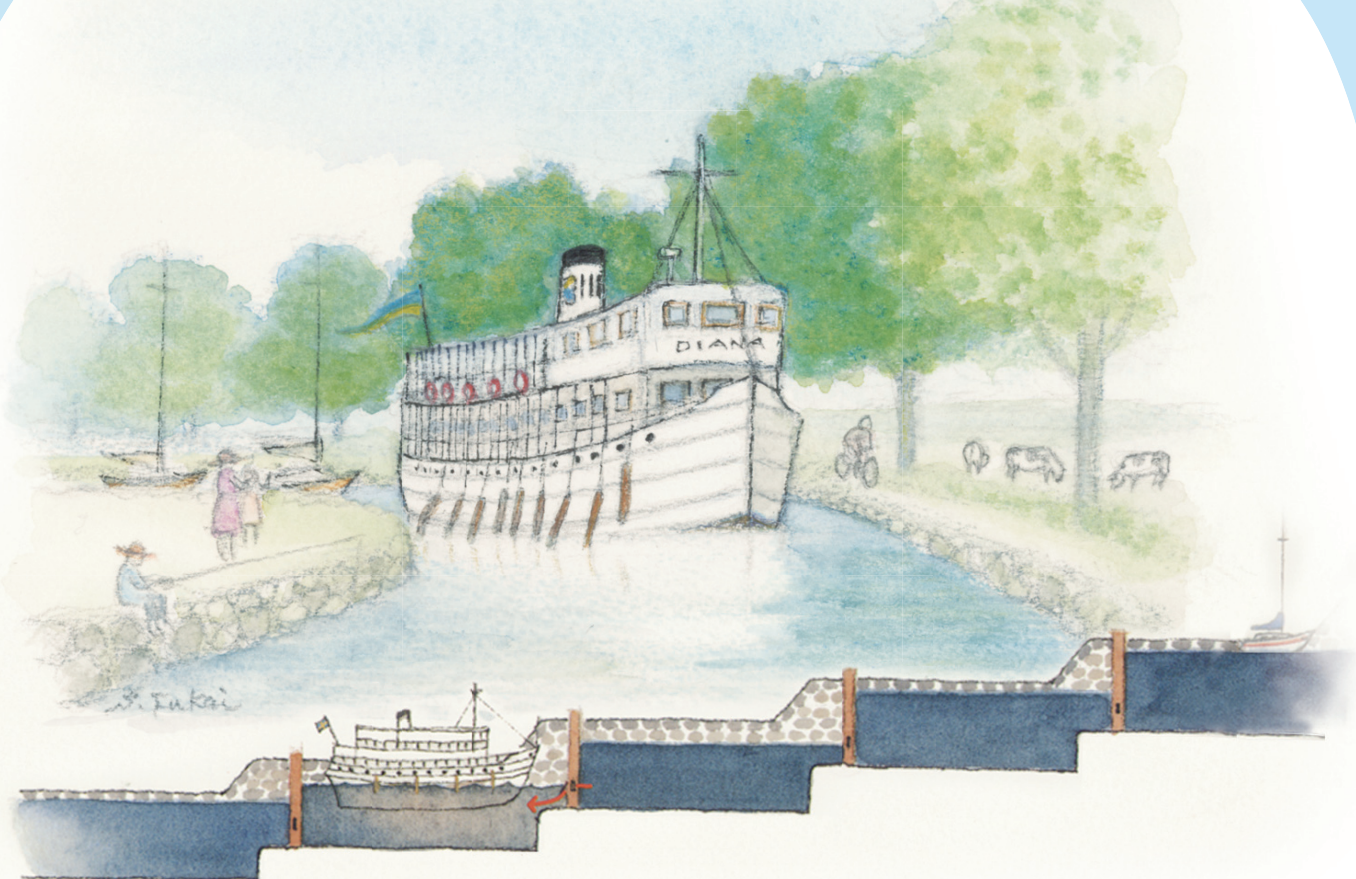
Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。絵本に『エータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『一枚の布をぐるぐるぐる』など。北欧絵本『森はみんなの保育園』は昨年10月に出版された(全て福音館書店)。

[ホームページ]
www.setsukofukai.com



Sweden 旅の途中で (絵・文 深井せつ子)



「イエータ運河を行く」

その昔、どここの国でも物資の輸送は航路だった。スウェーデンと外国との海運では、スカンジナビア半島の半分ほどをぐるりと回らなければ、バルト海に面する首都のストックホルムには寄航も出航も出来なかった。少々もどかしい航海だ。

1810年、このU字型航路から一直線で首都に向かうという国土横断運河の建設がはじまった。イエータボリ(ヨーテボリ)からストックホルムまでの運河航路、それが通称「ブルーリボン」と呼ばれるイエータ運河だ。建設後は木材や鉄鉱石などの物資が東西を盛んに行きかったという。遊覧船や客船も賑やかだったらしい。

現在は、輸送のほとんどが車や列車に変わった。国土横断は車なら7時間ほど。だから、イエータ運河は今も輸送に利用されることはない。利益優先の国ならば、不要なものとして埋められてしまったかもしれない。でも、この国では夏を楽しむ人々のためにと全区域が航行可能だ。夏の盛りはヨットやボート、観光船でにぎわっている。その上、3隻の蒸気客船は造船当

初の上まで今も健在。航海方法・水門通過・停泊先なども、全てが昔のままのスタイルだ。

私は全行程を行く三泊四日の蒸気客船に乗り込んだ。行程には、バルト海や大小の湖沼通過も含まれるが、楽しいのは船の幅ほどの狭い運河航路部分。手が届きそうなところに牛が草を食み、ピクニックの人が居る。中でもとびきり面白いのは65箇所もある水門通過。水門の一つ一つを通過していく様は、まるで船が階段を登るようで興味深々。

あんまり楽しくて、人に話したくて、とうとう私は絵本を出版することになった。

(福音館書店・たぐさんのふしぎシリーズ「イエータ運河を行く」1993年)

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。絵本に『イエータ運河を行く』、『風車がまわった!』、『一枚の布をぐるぐる』など。北欧絵本『森はみんなの保育園』は昨年11月に発行(全て福音館書店)。

[ホームページ]

www.setsukufukai.com



Sweden 旅の途中で (絵・文 深井せつ子)



「森 “ に行こうよ! ”

ストックホルムに住む友人に久しぶりに会った。ある博物館の庭でコーヒーを飲む。陽はうららかに、風が秋の香りを含んで優しく吹いていた。すると突然「これから森に水汲みに行くわよ! 車で10分くらいね」と友人が言ったので私は耳を疑った。そこは都心の中心部だったからだ。

友人は私を車に押し込むと、5分後にもう一人の友人を乗せ10分後には本当に“森”に着いた。二人はポトルと小さな手籠を持参している。急展開に戸惑っている私にかまわず二人はどんだん林の奥へと歩いていく。そう、そこはダーラナの深い森とは違って広い林という感じなのだ。

「ここよ!」と言われた所を見ると、樹木の間の窪地から、清水がこんこんと湧き出している。二人はポトルを水でいっぱいにした。その嬉しそうなこと。立て札にマナーメモがあるの、けっこう人が来るようだ。

「さあ、今度はベリー摘み!」と私は促された。えっどこにそんなものか、と思っていると、ちょこまか動く二人の女性は早くも「あったあった」と籠

に入れていく。後ろから付いて歩くと、本当にブルーベリーがあちこちに。

ベリーが採れてポロンと手の中に落ちる感触はとても面白い。いつの間にか、私も夢中になっていた。

時間が経ち、私達は収穫を見せ合った。たっぶりの水に籠いっぱいベリー。

「水は今晚の夕食用に、ベリーはジャムにするのよ」と二人は嬉しそうに言った。

彼女たちは、特にナチュラル思考とか地場食品好きというわけではない。普段の生活は水道水だし、ジャムは食料品店でも買うという。ごく普通に生活しているけど心の中のどこかに常に森が存在しているらしい。

IT時代になっても“森”は、みんなの恵みの森なんだね。なんだか幸せな気持ちになった秋の午後でした。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『一枚の布をぐるぐる』など。北欧絵本『森はみんなの保育園』は昨年11月に発行(全て福音館書店)。

[ホームページ]

www.setsukofukai.com



Sweden 旅の途中で (絵・文 深井せつ子)



「クリスマスの街で」

クリスマスまであと少し。スウェーデンの小さな古都イスタッドでも街は買い物が行き交い賑やかだ。刺激的な広告ネオンが無い街は、モミの木の緑とオーナメントが飾られていた。ショウウィンドウにはイエス様誕生のディスプレイやクリスマスグッズが人々の目を惹きつけている。

両側の建物の上に目をやると、各住居の窓辺もクリスマスの飾りで光が溢れている。教会の鐘の音もどことなく華やかに感じられ、街全体がクリスマスマーケットになったようだ。ただ、あたたかな雰囲気でも、ここは北欧。スカンジナビアの大地。石畳の道は冷たく身体は凍えそう。

街の中心まで歩いて行くと大道芸人がそこで活躍していた。チェロの演奏者、手品師、ジャズメン等々。その中で、彫像に扮した芸人が居た。身体を真っ白に塗り、台に乗ってじっと動かない。多くの芸人は動いて人気を集めるのに、この芸は動かないことが仕事。私はし

ばらく見つめていたが、本当にギリシャ彫刻のように見事だったので、彫像青年の足元の箱にコインを数枚入れた。

すると、チャリンという音と同時に彫像がギクシャクと動きたのだ。

彫像の真っ白の手が驚いている私の手を取った。「冷たい！」と思わずひっこめようとする、彫像は身体を折っておじぎをし、私の手にキスをした！

回りから拍手が聞こえる。立ち止まって様子を見ていた人々が笑顔で手をたたいているのだ。

氷のように冷たい唇だったけど、彫像青年の澄んだ目も美しかったし、なんだかちよっとホカホカした気分になってしまった。

Profile

画家。北欧各国の清涼な風景に魅かれ、北欧行を重ねながら、個展・出版等で作品の発表を続けている。絵本に『イエータ運河に行く』、『風車がまわった!』、『一枚の布をぐるぐる』など。北欧絵本『森はみんなの保育園』は昨年11月に発行（全て福音館書店）。

[ホームページ]

www.setsukofukai.com

※ P.26に個展のご案内があります。